

ピラミッド校舎 解体見学記

■協力：㈱フジマ 長塚孝志氏

ピラミッド型の階段教室

学習院大学中央教室（通称ピラミッド校舎）は、東京文化会館などの設計で知られる建築家前川國男氏によって1960年に建設されました。東西南北のいずれかで始まる学内の建物名は、全てこの中央教室を中心にして付けられており、大学のシンボリックな存在として50年近く愛されてきました。頂上までの高さは約25m、700人を収容できる階段教室で、一見レンガ敷きに見える床材は、アラスカ産の出来た木製のブロックです。在学生・卒業生にとっては、この木製の床に塗布されたワックスの匂いも、思い出の一つでした。

四角錐の形状から「ピラミッド校舎」と称された中央教室ですが、実は正四角錐ではなく、北東側に偏心していたのをご存知でしょうか。これは、西南方向に教壇を設けるという構造上、音響効果が最大限に活かされるよう設計されたことによるものです。

新しい中央教育研究棟建設のため、借しまれつつも取り壊されることになった中央教室。今号では、その解体工事の様子をご紹介します。

骨組みが現れて

2008年3月下旬、すでに周囲を柵でおおわれていた中央教室の解体工事がスタートしました。まず着手されたのは、教室内の什器・備品類の搬出です。1階部分の机と椅子が次々と取り払われ、がらんとした床が剥き出しに。【写真①机と椅子が取り払われた教室内】階段状の椅子と、冬場の授業で足元を温めてくれたスチームが外された後は、階段教室の名の通り、教壇を取り囲むように、大きなコンクリートの階段が現れました。【写真②椅子が外された階段席】コペンハーゲンリブ（木製の吸音材）が剥がされた壁面は、X字に組まれた躯体が一層目立ち、コンクリート打放しに特長の見られる前川作品らしさがより伝わってくるようです。

思い出と一緒に保存

次に、歴史資料として保存される中央教室の部材が丁寧に取り外され、史料館の収蔵庫へと運ばれます。保存対象となったのは、机と椅子、木製の床ブロック、階段の滑り止め、内部壁面の丸環、教室下部の窓、映写室の窓枠、外壁のプレキャストコンクリートパネルなどなど、中央教室を語る上で欠かせないものばかり。建築史学者、建築家、屋外展示のスペシャリストなど、様々な方面での専門家から助言を受けながら、後世に遺すべき部材を決め、実際に取り外し作業に携わる担当者の方と綿密に打ち合わせを重ねた上で、どの部分をどのような形状で遺すのかを具体的に詰めていきました。

頂部切り離し

4月中旬、ピラミッド頂部切り離しの開始です。中央教室を記念したモニュメントとして、学内に設置する計画があるため、頂上から高さ1.5mのところまで切断します。最上部に足場が組み、作業員は高所作業車（クレーン車）で地上と足場を行き来することに。高さ約25mの足場では、命綱となる安全帯を装着しながらの作業です。ワイヤーソー（大型カッター）によって指定された部分が切り離されていきます。【写真③④最上部に組まれた足場/大型カッターで切断】

そして、いよいよ切り離された頂部を地上へ。先に足場へ到着した作業員が、ピラミッドの上部にワイヤーを括り付けていきます。途中、何度かピラミッドを持ち上げて、バランスを確かめながらの慎重な作業です。作業開始から40分、ついにクレーンに吊り下げられた頂部が地上へ降ろされました。【写真⑦頂部切り離し】



①机と椅子が取り払われた教室内(3月26日)



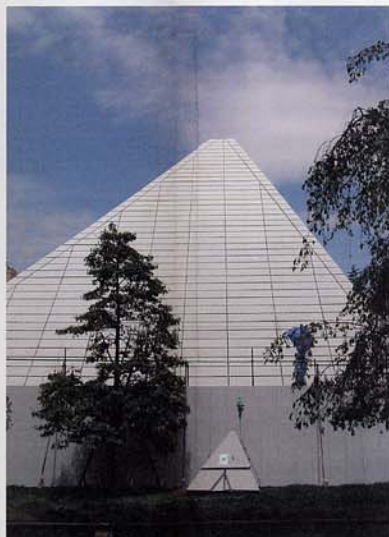
②椅子が外された階段席(3月26日)



③最上部に組まれた足場(4月17日)



④大型カッターで切断(4月18日)



⑦中央教室と頂部(4月21日)



⑧解体車両組み立て途中(4月21日)



⑨解体車両完成(4月21日)



⑤頂部切り離し(4月19日)



⑥足場取り外し(4月19日)



⑩解体作業中の様子(4月25日)

天空の足場も

続いて、足場の解体作業に入ります。足場周囲の柵やポールが次々と外され、床板と支柱だけになると、作業員達はクレーン車に移動。今度はクレーン車のサークルから身を乗り出して、何度も足場と支えの具合を確認します。頂部切断のためだけに組まれた大きな足場が地上に降ろされると、学内のあちこちの見学者から拍手と歓声が起こりました。【写真⑥足場取り外し】

足場が取り払われた後に現れたのは、頭部を切り取られた中央教室。一つの役目を終えたその姿は、堂々として見えるのではないのでしょうか。保存場所に置かれた小さなピラミッドと並べてみると、北東に偏心した四角錐であるのがよく分かります。東西南北の貼紙が付けられているのは、モニュメントとして展示する際、元あった方向通りに設置するための大切な目印です。【写真⑦中央教室と頂部】

まずは重機の組み立てから

4月下旬、保存すべき中央教室の部材が全て取り外されると、ついに解体工事は最終段階を迎えます。ここで登場するのが、長さが40m以上にもなる大型ロングアーム重機。巨大なクラッシャーであつという間に取り壊して……と思いきや、ことはそれほど簡単ではありませんでした。なにしろ、これだけ大きな重機。学内を通行することはできないため、車両を組み立てるところから始める必要があるのです。

まず、早朝トレーラーで運ばれた重機のキャタピラーの車両間を40mのアームの重量に耐え得るよう、元の車幅まで広げます。これは、トレーラーの幅に合わせ、キャタピラーの両輪を狭めた状態で運ばれてきたためです。【写真⑧解体車両組み立て途中】

元の車幅まで広げると、今度は分割されたアームをクレーン車で吊り下げながら、次々と接続していきます。とはいえ、何しろ巨大な重機なので、別のクレーン車で接合部分まで上がっては、微妙な調整を加えながらの大変な作業です。ほぼ半日がかりの作業が終了し、ついに巨大な解体車両の完成です。【写真⑨解体車両完成】

解体は片付け

そして、いよいよロングアーム重機の先に取り付けられた大きなハサミが、中央教室の外壁パネルをつかみ、次々と切り離します。両脇2台のクレーン車に乗った作業員が左右から水をかけているのは、舞い上がる粉塵をおさえるためのもの。同時に、解体車両の運転席からは見えにくい側面や後面での作業指示を、無線で伝える役割も担っています。廃材を鉄だハサミは、外壁開口部の隙間から器用にアームを差し込み、建物内部へ廃材を積み重ねていきます。その繊細なハサミ捌きは、見事としか言いようがありません。解体される建物が、そのまま廃材置場になることにも驚きます。「解体は片付けですから」という作業担当者の言葉に思わず納得。解体前に、正面の中央部の外壁だけが剥がされ、格子状の梁が剥き出しになっていたのは、まさにこのためだったようです。その後も、まるで人間の手のような動きで着々と外壁を切り離し、中央教室は、次第に小さくなっていきました。【写真⑩解体作業中の様子】

着手から、およそ二ヶ月。こうして中央教室は、私たちの前から姿を消しました。【写真⑪ほぼ解体された中央教室】

現在、中央教室の解体部材の一部は、当史料館で保存しています。建物はなくなりましたが、学習院大学の歴史の一部として、展覧会や写真集を通して公開する予定です。

※この解体作業の映像は、9月13日の史料館講座でご紹介します。
(生田享子)



⑪ほぼ解体された中央教室(5月12日)